

研究発表

幼児の性格特性と曲線型

—— 幼児用内田クレペリン検査 ——

東京・井草幼稚園 鈴木 和 長

幼児にみられる種々な行動特性が、いかなる精神機能にもとづいているかを知る手がかりとして、内田 Krapelin 検査を幼児向きになおして施行してみたところ、下図のごとき結果を得た。「1図」は適度によく遊び、仕事もし、全く手のかからない児の曲線であるが、成人の常態者定型曲線と傾向を同じくしていることがわかった。

「2図」は、落ちつきなく、手こずる児の曲線であるが、定型の傾向を逸脱している。「3図」は、ピアノの教師も有望視している児のもので、定型傾向をもち、「1図」より深い切り込みがあり、感度の高い児であることを示している。「4図」は、曲線に著しい弛緩が認められる。この児は永く病気で休み、回復して通園しだした時に検査したものであるが、まだ心身ともに立ち直っていないことを物語っている。「5図」は集団生活に入ることを好まず、絵などを一日中描いている無口な児の曲線で、成人の場合の企画、研究向き

ともくされる一群の曲線傾向をもち、名人肌といわれる分裂性格的傾向をもつ一種の曲線型と傾向が似ている。「6図」は、よくはしやぐ子で、躁状態、意志の興奮を示している。
以上のように、問題のない子は定型をとり、何らか問題のある児は非定型をとるように、従来、成人について言われているような結果が精神発達の違い段階のものについても同じような結果が出た。

